

第4学年「国語」学習指導案

授業者 片山 守道

2月14日（金） 3階B室 9：00～9：40

1 単元名 読んで感じたことから 学習材『数え方を生み出そう』

2 単元について

単元	○日本語の数え方についての筆者の考えを捉えて、日本語に対する自分の考えを広げる。
目標	○日本語について感じていることから、対話を通して、日本語の可能性を考える。

本校では、4年生から定員15名の帰国児童教育学級を設けている。帰国児童教育学級は、4年生では単独学級だが、5年生からは一般学級との混入となる。帰国児童教育学級には、学期毎に随時編入できるようにになっており、今年度の4年生は、1学期4名でスタートし、2学期に3名、3学期にさらに1名が加わり、現在は8名が在籍している。帰国児童は、3年間以上の海外生活をしてきており、日常会話に支障がない程度に日本語は習得しているが、思考言語は日本語ではない子もおり、語彙が乏しかったり、漢字の読み書きが苦手だったりする子も多い。サークル対話や共同推敲、音読などを積み重ねながら、少しずつ生活に根ざした日本語の習熟を図ってきた。

学習材として取り上げる『数え方を生み出そう』（飯田朝子）は、何気なく用いている日本語の「数え方」を話題とし、日米の数え方の違いや日本語の数え方の特徴、新たに数え方が生み出された例などを示すことを通して、日本語に対する筆者の主張を述べた説明文である。結論では、伝統的な数え方を継承することの大切さとともに、言葉の柔軟さにも目を向け、ものの見方を広げて、新しい数え方を生み出そうという提案がなされており、読者は、自分も新しい数え方を生み出してみたいという思いの高まる文章となっている。異言語・異文化の経験を積んできている帰国学級の子どもたちにとっては、一般学級の児童以上に共感をもって読むことが出来る文章ではないかと思われる。

日本語（言語）は完成されたもので改変の余地はなく正しい日本語を学ばなければならないという固定観念に囚われがちな子どもたちにとって、自分たちで言葉を作り出せる可能性があるという筆者の主張は、まさにものの見方を広げるものであり、言葉との向き合い方をより主体的なものに変えていく原動力となる。日本語の経験は乏しくても、文章を読んで感じたことから、海外も含めたこれまでの生活経験や言語経験をもとに感度を働かせて日本語を見つめ直し、自分なりの日本語観を見い出してほしいと願っている。

3 学習指導計画（8時間目／全10時間）

- （1）日本語の数え方集めをし、そこから感じたこと、気づいたことを話し合う。（1時間）
- （2）『数え方を生み出そう』を読み、筆者の主張を捉える。（4時間）
- （3）自分が考えた新しい数え方を発表する。（2時間）
- （4）日本語の気になる点を話し合い、「新しい○○」を考えて発表する。（3時間 本時1／3）

4 本時の学習について

（1）本時のねらい

○自分の経験から日本語の気になる点を見つけ、言葉を柔軟に変える可能性について考えることができる。

（2）予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留意点
1 これまでの学習を振り返り、本時の課題を確かめる。	○これまでに出的日本語への気づきを確認し、論点について板書する。
2 日本語の気になる点について、サークル対話で話し合う。	○聴き合うことを大切にする。教師も対話に加わり、必要に応じてファシリテートする。
3 対話を元に「新しい○○」の案を書く。	○まとまった考えがあれば、共有する。